

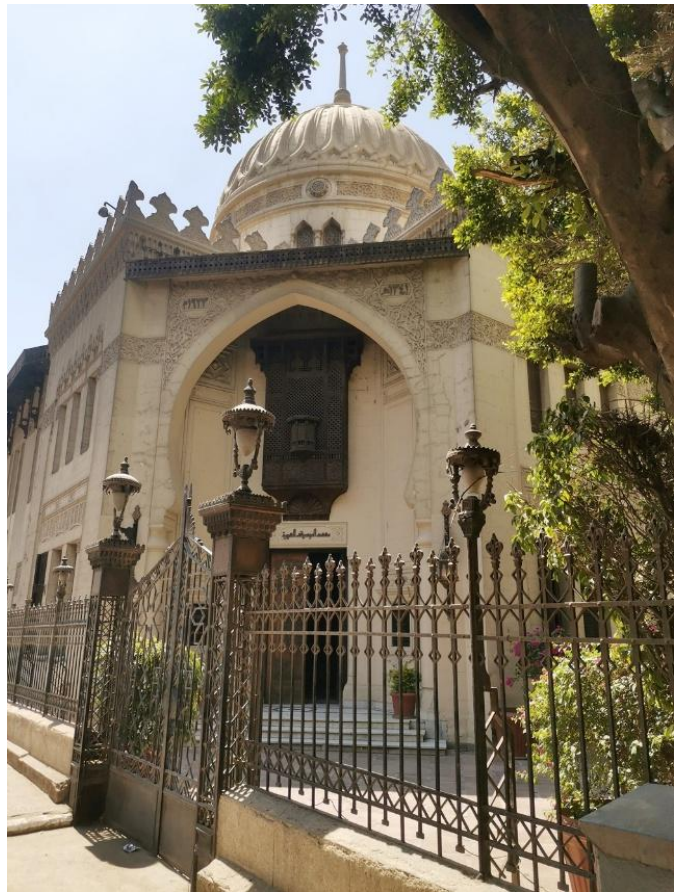
アラブ音楽ゆるトリビア 第一回

アブドルワッハブと「バスブーサ」

富澤規子

アブドルワッハブは伝統なのか？

私がエジプトに滞在して 20 年以上がたちます。家族関係でもなければ赴任でもなく、ビジネスさえしていません。その上、中東研究関係の大学出身でもないにも関わらずエジプト現地で学位まで取ったと説明すると、滞在理由や学生生活について質問責めが始まります。日本人にとってはエジプトの大学と言えばカイロ大学一択なので、何度も何度も「私はカイロ大学出身ではありません」と繰り返し、芸能芸術専門大学と説明すると、イスラム教の国で芸能教育があるのかと驚かれます。さらにその大学が、カイロ大学のような一般大学ではなく文化省大学校となると質問者も何を問いかければいいのかわからないかのような顔で応答がとまりがちです。私も自分の立場をどう説明すればいいのか、若干途方に暮れました。



アラブ音楽学院。現在は劇場として使われている。
2026 年 4 月筆者撮影。

私が準修士号を取った大学校は 1959 年設立の文化省大学校「Academy of Arts (Egypt)」で、アラブ音楽史に必ず登場する 1914 年設立の「Arab Music Institute アラブ音

楽学院」を前身としています。私はこの大学校の「High Institute of Folk Arts 高等民俗学院」で工芸専攻でしたが、アラブ音楽についても基礎教養として授業を受けました。

そして何より、入学以前にアラブ音楽とベリーダンスについて新聞社や出版社の資料室で夢中になって調べ、そこで身に着けた知識がアカデミー・オブ・アーツの入試合格につながったのです。

私がアカデミー・オブ・アーツに入学した 2009 年は、日本人若年層でベリーダンスとアラブ音楽がサブカルチャー的に流行っていました。この頃はまだ、エジプト在住邦人と接点があったので、入学した大学校の説明からアラブ音楽の話題になる場面がしばしばありました。話題になるのは確実に「アブドルワッハーブ」作詞で「ウンム・クルスーム」歌唱の名曲「エンタウムリー」です。そこで「伝統音楽はいいですよ」などと言われると、どのように説明したものかと、私はまた言葉に迷うのでした。

何故なら「アブドルワッハーブ作曲は伝統音楽技法を用いた現代音楽で、そもそも著作権すら切れていない」と言う、至極当たり前の事実が通じないほど「アブドルワッハーブは古典音楽である」との誤認識が、2009 年当時はアラブ音楽愛好家の間では強固に流布していました。そのうち、アカデミー・オブ・アーツにもアラブ音楽にもうまく説明する方法がわからなくなり、大学校での講義や友達付き合いで忙しくなるにつれて、次第に在住邦人やアラブ音楽愛好家との関係からも遠のきました。

あれから十数年が経ち、ベリーダンスやアラブ音楽の流行も日本では落ち着いたようです。そろそろアラブ音楽やエジプト芸能について何か書いても良いかなと思うようになりました。知っていればアラブやエジプトがちょっとだけ近くなる、そんなトリビアを扱ったエッセイシリーズを始めます。

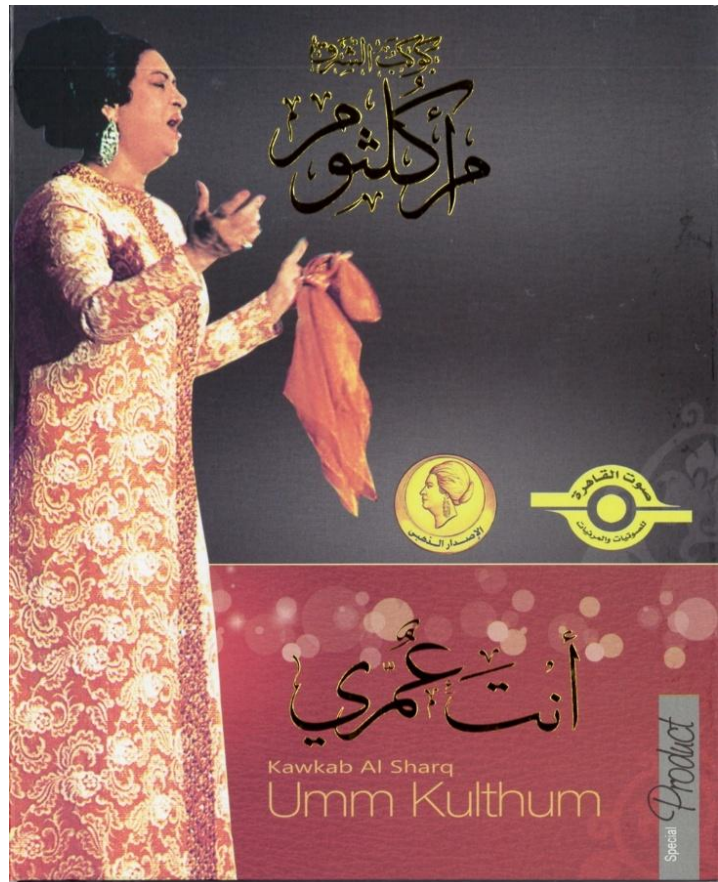
シリーズを始めるにあたり、最初のトリビアは「ワッハーブ作曲は古典音楽ではない」です。これを書いている 2026 年現在、彼の楽曲は著作権すら切れていません。

アブドルワッハーブの功罪

20世紀エジプト芸能を調べた時、筆頭にあがるのはウムクルスーム（1898年生または1904年生と諸説あり－1975年2月3日）、ついでムハンマド・アブドルワッハーブ（1902年3月13日-1991年5月4日）です。

ムハンマド・アブドルワッハーブは、まず流行歌手です。ただ、ウムクルスームへ楽曲提供した「エンタウムリー（あなたは私の命）」がナセル時代の国威発揚に使われ、エジプト国外で突出して有名になったため、日本でも「作曲家である」との認識がまだまだ強いようです。これを書いている2026年4月閲覧の日本語版 Wikipedia では「エジプトの作曲家、歌手、俳優。」と記載されていますが、アラビア語版 Wikipedia では「مطرب وملحن وممثل مصري، (エジプトの歌手、作曲家、俳優。）」とあり、あくまでもワッハーブは歌手であり、作曲した代表作の多くをワッハーブ自身が歌唱しています。その作曲数は1800作から1820作以上であるという通説で、これには膨大な数のタイアップ小曲が含まれた数です。

これだけの数の作曲依頼があった点で、ワッハーブは間違いなく成功した職業音楽家でしょう。一方、これだけの作曲数だと、必ずしも名曲とは言えない作品も散見でき、これが彼の評価を揺るがせる結果となりました。



新装版「エンタウムリー」CD ジャケット。
サウトルカーヒラ社（Sono Cairo）発行。

ワッハーブ評価に関する最も重要な人物の一人は、エジプト国立アラブ音楽団の指揮者であったサリーム・サハーフ（1941年－）です。パレスチナ生まれのレバノン人で、1994年にエジプト国籍を取得しています。エジプト国籍が国立アラブ音楽団に籍を得る際の必須条件なので、彼のエジプト国籍は政府から贈られたとされ、入団は鳴り物入りでした。

エジプト現地のアラブ音楽研究者の間では「サリーム・サハーフのワッハーブ擁護」は有名で、皮肉にもサリーム・サハーフ自身がエジプトで名声を高めれば高めるごとに、「擁護しなければならないワッハーブ批判」が蒸し返されるのです。

彼のワッハーブ擁護は、ワッハーブ存命の1979年6月に発端を見せます。ユネスコのアラブ地域支部が「ワッハーブの盗用リスト」を発表し、これがアラビア語圏の多くの活字メディアに掲載されました。ワッハーブの作曲にはモーツァルトをはじめとした西洋音楽からの盗作があるとし、13例もの盗用部分が列挙されました。

この告発で執拗にワッハーブを攻撃した側は、アジーズ・アルハッジ・アリハイダルと言うイラク人で、1971年に国連のイラク代表に任命されています。それ以前はイラク共産党中央司令部（Iraqi Communist Party – Central Command）の事務総長でしたが、1969年に逮捕釈放された後、共産黨員としての活動から身を引いたとされています。ガマル・アブドルナセル時代（1956-1970年）のエジプトは民族主義と社会主義傾向が大変強く、政権初期には反共産主義を掲げ、共産主義者を大量投獄しています。投獄された芸能人としてはダンサー女優であり共産主義者であったタヒヤ・カリオカが大変有名で、彼女の投獄事件は2012年放送の連続ドラマ『カリオカ』の冒頭にもなっているほどです。ワッハーブの盗用疑惑が持ち上がる以前の段階で、社会主義と共産主義の対立が、芸能方面にまで強く影響を及ぼしてました。

さて、ワッハーブはナセル政権の国威発揚に利用されたと前述しましたが、この種のエジプト歌謡曲は「ワタニー（愛国的）」とジャンルづけられテレビやラジオでもてはやされました。その最たるものが1964年リリース「エンタウムリー」です。

その後、エジプトはサダト時代（1971-1981年）になり、歌謡曲の流行はウンムクルスムやワッハーブの重厚な愛国歌から、より軽快なポップス風に次第に移っていきます。若手歌手とそのファンは既にポップス志向に移行しており、ワタニー楽曲は時代遅れの気配を見せていました。その上追い打ちをかけるように、イスラエルとの和平が音楽の世界にまで影響します。1979年3月にエジプト・イスラエル平和条約が締結されると、エジプト国内外の不満と反発、怒りは凄まじく、これがナセルに重用されたワッハーブにまで飛び火し、盗用リストの流布と論争につながった、と言うのがアラブ音楽史研究での定説の一つになっています。

しかしアジーズ・アルハッジ側の批判は単なる誹謗中傷ではなく、盗用元の指摘が詳細で説得力がありました。その盗用リストを元に聞き比べをすると、ワッハーブ作曲には西洋音楽的なフレーズも多いと気付けます。なにしろワッハーブが生涯に作曲した作品は大小含めて1820作以上です。これだけの数を手掛けていれば、どこかで聞いたようなフレーズが生まれてしまうのも止む無しなのかと擁護したくもなるわけです。このリストはワッハーブ研究に影響を与えており、2026年現在では、ワッハーブは西洋音楽を大きく取り入れ必ずしも伝統的とは言えない部分のある音楽家と評価されています。そしてこの盗用疑惑はあくまでも引用であるとの見解で一応は落ち着いています。

私がこの問題に最初に触れたのは2007年、アラブ芸能についての資料を芸能雑誌社ダールダール・アルヒラール社の資料室で調査していた時です。

「音楽家サリーム・サハーブが今週の問題を爆破する！ムハンマド・アブドルワッハーブは音楽泥棒だ！」と、刺激的なタイトルのスクラップに驚いたのです。このスクラップは発行年の記録が失われていましたが、恐らく文脈から2001年から私がこのスクラップを発見した2007年の間に発行された、芸能雑誌『アルカワーキブ』掲載の4ページにもわたる特集記事でした。当時の私のアラビア語力では到底読めない文章量と語彙だったので、資料室スタッフ達に要約を聞けば、前述した大論争が昔あったと教えてくれました。



芸能雑誌『アルカワーキブ』特集記事のスクラップ。
誌面左上がサリーム・サハープ近影。

この記事の冒頭で、サリーム・サハープは「21世紀になってまで、ワッハープの命日になるとこの問題が繰り返される。まるでこの問題をまだ知らない者にこの問題を発見させるかのように」と憤慨しています。

しかし、90年代から2000年代にかけてアラブ世界で最重要な音楽家であり、アラブ音楽のオピニオンリーダーであったサリーム・サハープの発言だからこそ、私はこのスクラップを見つけられたと言えます。なにしろ、擁護者サリーム・サハープと批判者アジーズ・アルハッジでは知名度が雲泥の差です。

この盗用疑惑はワッハープを語る際に避けては通れない議論なので、遅かれ早かれ知り得た論争です。それにしても、サリーム・サハープのおかげで、かなり早い段階で知ることができたのは僥倖だったと思います。

キッチュポップの極み「バスブーサ」

1820作をこえるワッハープ楽曲には、西洋音楽の要素を大きく取り入れた作品も多く、その一部に盗用を疑われる引用まであった、と言っても日本人にはピンとこないかもしれません。海を越えて日本に伝わってくる彼の代表作は、「エンタウムリー」をはじめとして手の込んだ間違いのない名曲で、古典楽曲技法と楽器を用い、オリエンタル的な異国情緒的にあふれているからです。

そんなイメージをちょっとだけ崩すために、もしくはオブラートを外してもらうために、ワッハブ楽曲の中でも「キッチュの極み」と謳われた作品をひとつ紹介します。

ナギーブ・マフフーズ作の小説『ミダック横丁（1947）』が1963年に映画化された際に、主人公ハミーダを演じる女優シャディーヤ（1931-2017）に劇中歌として歌わせる目的で作曲され、不採用になったとされる「バスブーサ」です。

この「バスブーサ」がどんな曲なのか、まずCD収録はされない曲なので、検索で探し出す必要があります。検索ワードは「بسبوسة عبد الوهاب」ですが、その前に名曲「エンタウムリー（إنت عمري）」も検索して是非聞き比べて頂きたいです。エンタウムリーは1964年リリースなので、ほぼ同時期の作曲である点にも注意してください。

以下に歌詞冒頭の一節を訳します。

「バスブーサ」

作詞：フセイン・エルサイド

作曲：ムハンマド・アブドルワッハブ

歌唱：シャディーヤ

بسبوسة بسبوسة باالاسبوسة باالاسبوسة

バスブーサ バスブーサ

バーースブーサ バーースブーサ

بت يا دوسة يا دوسة شايه البسبوسة

娘っ子 ドーサちゃん

バスブーサ持ったドーサちゃん

ولله احلويتي وكبرتي وبئيتي عروسه

ほんとうに 可愛く 大きくなっちゃて もうお嫁にいけるようにおなりだね

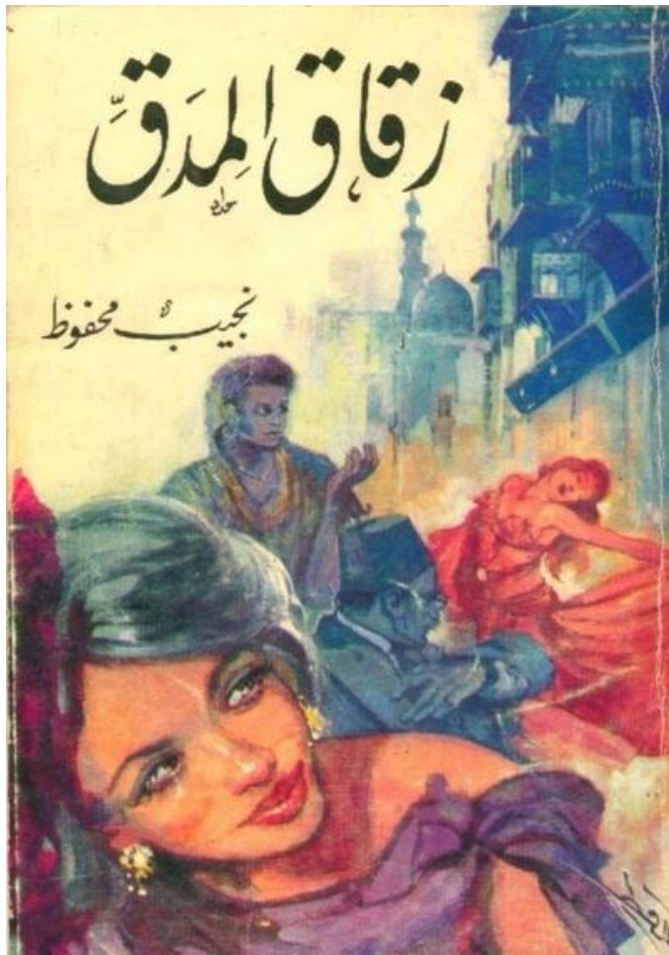


中東菓子バスブーサ。2026年4月筆者撮影。

バスブーサは蜜がふんだんにかかった柔らかい食感のケーキで、代表的な中東菓子の一つです。「バスブーサ」は可愛い女の子への呼びかけに使われる言葉でもあり、この歌詞では「バスブーサ」が何度も何度も繰り返されます。

聞き比べてみて如何でしたでしょうか？ この「バスブーサ」も伝統音楽に聞こえましたでしょうか？ とても同一人物による同時期の作曲とは思えない落差です。ワッハーブ作曲のうち西洋音楽からの盗用ないし酷似を疑われる作品はまだ良作です。なにしろ仮にインスピレーションを得たとしてもその大元は名曲なのですから。

ワッハーブが残した楽曲でキッチュな歌謡曲は、「バスブーサ」のようなタイアップ小曲にあり、これらの考察もワッハーブ鑑賞の面白さの一つでもあります。



小説『ミダック横丁』ペーパーバック表紙装丁。

ワッハーブはシャディーヤに相当熱を上げていたようで、映画『ミダック横丁』で見送りとなった劇中歌「バスブーサ」を、1981年公開映画『思い出の谷』の劇中で彼女に歌わせることに成功しています。シャディーヤはその生涯を通して名作への主演が多い名女優ですが、映画『ミダック横丁』制作時はまだアイドル的な位置づけの若手でした。そこに既にエジプト芸能界のご意見番として君臨していたベテラン歌手のワッハーブが執心したのです。

当時のワッハーブ評価は、ウナムクルスムとのタイアップになる「エンタウムリー」が「لقاء السحاب (雲の出会い)」と称された賛辞が一般的で

す。おそらく 2026 年現在、日本語で検索してもこの評価が主流かと思います。常に乾いたエジプトの空では雨をもたらす雲は縁起がよく、またその雲同士が近づきあう気象現象は希有です。ウナムクルスームとワッハーブは双方すでに芸能界の大御所同士で、これに至るまでに共演がなかったゆえに、初共演はめったにない素晴らしい空模様例えられたのです。

それと同時進行して、ワッハーブは若手女優シャディーヤの歌声を見出し絶賛し、その可愛らしさや無邪気さを引き立てる極めてキッチュポップで軽快な「バスブーサ」を作曲しました。そもそも政権に担ぎ上げられるような愛国歌は、歌謡曲としては新鮮さに欠けた先の短いジャンルです。となれば、若手女優に積極的に楽曲提供をし、新しいスタイルを模索しなければ芸能界での彼の影響力も次第に弱まったことでしょう。

国威発揚に演出された評価と、大衆に支持され売り上げ続けなければならない芸能人として評価の落差に、ワッハーブの人間臭さと芸能界の諸事情を感じずにはいられないエピソードです。

ところで、ワッハーブが生涯で作曲した 1820 作のうち、最もキッチュであるとも言われる「バスブーサ」が、その低評価にも関わらず、いつまでも忘れ去れない背景には一つの余話があります。

朱明英（1950-）と言う 30 以上の言語を操る中華人民共和国出身の女性歌手が、80 年代にエジプトを訪れ「バスブーサ」をテレビの歌謡ショー番組でアラビア語のまま歌唱しました。このテレビパフォーマンスは放送当時は大分面白がられたようですが、放送年が詳しく伝わっていない点を考えても、しばらくは忘れられていたようです。

ところが、2008 年北京オリンピックに向けて、その前年くらいから中華人民共和国への関心が高まり、中国に関する話題がいくつも紹介されるなかで、この「バスブーサ」が再発見されてしまいます。

2007年当時、私は「アラブ音楽とベリーダンスの謎」を解くべく、芸能雑誌社やオペラハウスに足蹴く通い、芸能記者や音楽家から多くのトリビアを授けられました。彼らは一般のエジプト人に比べ、音楽や芸能に対して豊富な知識と情報をもつ教養人達です。そんな彼らが思いだしたように「バスブーサ歌える?」「バスブーサ知ってる?」と私に聞くのです。何故なら私がアジア人女性であるがゆえに、彼らの脳裏に朱明英が浮かんでしまうからです。

私がこの稀なるキッチュなワッハーブ作曲「バスブーサ」を、調査の早い段階で知りえたのは、北京オリンピック開催前のタイミングで芸能雑誌社に入り浸っていたゆえの全くの偶然でした。と言うことは、いまだ巡り合っていないキッチュポップなワッハーブ楽曲がまだまだいくらでもあるはずなのです。

「盗用リスト」と「バスブーサ」、このムハンマド・アブドルワッハーブの些細な瑕疵を照らす事柄にかなり早い段階でたどり着いつけた巡りあわせは「ワッハーブは伝統的な古典音楽家である」とのイメージから決定的に脱却する好機となりました。

そして、この頃から日本人アラブ音楽愛好家と会話がいよいよ噛み合わなくなりました。知識のないまま「エンタウムリー」を聞けば、その美しい旋律は異国情緒そのもので、西洋音楽から遠く離れた旋律は「異国の伝統音楽である」と結論付けたくなる誘惑を常にはらんでいます。

オリエンタリズムとフォークロリズム

アブドルワッハーブ楽曲が伝統音楽と誤解されやすいこの問題について、中東文化について知識のある方でしたら、いわゆる「オリエンタリズム」が頭に浮かんでいることでしょう。

ところが当時 2000年代から 2010年代半ばでは「現地エジプト人からウナムクルスムやワッハーブは伝統音楽だと教えてもらった」と言う日本人の声も聞きました。べ

リーダンスの流行からエジプトへ音楽修行に来ていた日本人達が、町の音楽教師から習い持ち帰った情報が流布していたようです。



カイロ市下町の楽器店店内。2005年5月筆者撮影。

この町の音楽教師達は、私達外国人に虚偽を教えたのでしょうか？

彼らの本業は国立系楽団に所属せず、テレビ映画業界からも遠い市井の演奏家です。レストランやプライベートパーティーでの演奏を生業とし、カフェや楽器店で知り合った外国人相手の音楽教師はあくまでも副業のようでした。彼らは学識を必要としない立場なので、本当にワッハ

ーブ楽曲をトラディショナルと思い込んでいた可能性もあります。いわゆるフォークロリズムのため、彼ら自身がエジプトの伝統が何を指すのか意識できていなかったのではないかと、私は推測しています。

フォークロリズム (Folklorism) とは、Hans Moser と Viktor Gusev により 1999 年に提唱された概念で、伝統文化が本来の文脈から離れ、パフォーマンスや商品として再構成された現象を指します。「よさこい祭り」や「恵方巻き」がこれにあたり、「作られた伝統」などとも解釈されます。フォークロリズムでは、観光産業や商品展開の商業宣伝活動で「伝統的である」とのキャッチフレーズ多用もよく指摘される特徴です。

他に日本でフォークロリズムの例としては、民謡から発展した歌謡曲のジャンル「演歌」があります。演歌は番組宣伝で「日本の伝統」と説明されましたが、20 世紀の流行歌で、明らかに伝統音楽ではありません。しかし曲調や歌唱法を民謡やお座敷芸から取り入れ、歌唱者も民謡から転向流入した歌手が多く、一見して伝統音楽と誤解を受けやすいジャンルです。

エジプトでは、古典楽曲技法を用いて作曲歌唱されレコード会社や放送局に「エジプトの伝統」と宣伝されたウナムクルスーム歌唱やワッハーブ歌唱作曲の作品群がそのままあてはまるでしょう。外国人に演奏を教える町の音楽教師は研究者ではなく、そもそも教育的責任もないので、これらの作品群を外国人に対して簡単に「伝統音楽」と説明したであろうこと、それがそのまま日本に広まってしまったことは想像に難くありません。町の音楽教師が授ける「音楽の授業」は観光産業の域をでにくいのです。

私も語学学校時代の2005年頃、楽器店の音楽教師に伝統弦楽器ウード演奏を少しだけ習いました。音域が広く作曲に使われるウードは、技術面でのアラブ音楽理解に必須の楽器です。せっかくだから見るだけと訪ねた楽器店で間近に見たウードは美しく魅力的で、弾けもしないのに手に入れたい欲には抗えませんでした。そして、せっかく買ったのだから習ってみないかと誘ってくれた調弦師が、私の最初の先生になりました。

もっとも簡単な練習曲「سنة حلوة يا جميل (happy birthday to you のアラビア語バージョン)」さえ満足に弾けなかったにもかかわらず、先生は熱心に「リヤード・エルソンパーティ」の楽曲を教えてくださいました。私がウードを習う目的は、演奏家になるのではなくアラブ音楽の歴史や社会背景を知るためと説明したので、それでは「アブドルワッハーブではなく、リヤード・エルソンパーティでなくてはダメだ」と先生は私に再三の念押しをしました。



筆者が購入したウード。弾けないまま部屋の飾りになりました。2005年5月筆者撮影。

私の演奏の腕前は永遠の入門者なので、演奏練習はおまけで「ソンバーティがどのような音楽家だったか」のレクチャーが主でしたが、おしゃべりの域をでない極浅いものでした。2005年当時ですと、私もまだアブドルワッハブこそが至高の作曲家だと信じてエジプトに来たばかりでしたので、何故アラブ音楽史についてソンバーティこそが重要なのかとの新しい好奇心とともに、それならば何故先生は他の外国人にワッハブをメインに教えるのかと言う疑問もわきました。

これに関して先生の説明は明確で、まず外国人の間でワッハブが突出して有名になりすぎ、彼らがワッハブ楽曲を求めるので、その要求に応えるビジネス面の理由があり、そして第二には、ワッハブ楽曲は西洋音楽を取り入れていたがゆえに、外国人にも演奏しやすく教えやすい技術的な理由もあると言うのです。例えばワッハブ楽曲の最高峰「エンタウムリー」は、アラブ音楽の特徴の一つである四半音を含まない「マカーム・クルド（クルド旋法）」で作曲され、技術的には西洋音楽を修めた外国人にならさほど難しくはないそうです。また多くの教本でも「クルド」は最も簡単な旋法の一つで、西洋音楽とくにアンダルシア音楽でも使われると解説されています。

それにしてもアラブ音楽に触れるなら「ワッハブよりもソンバーティ」と私に繰り返すなら、他の外国人にもソンバーティを教えたほうがいいのじゃないかとの質問には、滞在期間が短い彼らには難しいなどと逃げられてしまい、なんとも煮え切らなかった経験もあります。しかし今思い返せば、あれもフォークロリズムの一端を見たのかと興味深くも感じています。

ともあれ、この音楽教師は私にとっては誠実な先生でした。なにしろ何もわかってない私に根気よく「20世紀のアラブ音楽でより重要な作曲家はソンバーティ」と刷り込んでくれました。これは当時の私については単なるトリビアでしたが、ダール・アルヒラール社の資料室でさらなるトリビアを授けられ、さらにアカデミー・オブ・アーツで指導を受けるようになると「何故ソンバーティなのか」が具体的な知識として後から追いついてきました。

「盗用リスト」や「バスブーサ」などのトリビアもそうです。一つ一つはアラブ音楽に少しだけ親しみがわくような断片的な豆知識にすぎません。ところが、このトリビアが結びつき一つの知識になった瞬間に、私はこの上ない高揚と歓喜を得ます。結びつけるヒントは教授達の一言であったり、芸能記事の一行であったりと些細な切っ掛けです。メトロの女性車両で行きずりの女性達とおしゃべりをしている時でさえ、そのヒントが降ってくる瞬間があります。そして長い年月をかけて貯めこんだトリビアが多ければ多い程、日常の何気ないはずみで断片的な豆知識が長い一本の糸につながった瞬間のドーパミンの分泌量は凄まじいです。これは日本に住んでいては得られない興奮で、引き上げ帰国が遠のく十分な理由の一つになっていました。

こうして、アラブ音楽についてのトリビアと知識が蓄積し続け、オリエンタリズムだけでなくフォークロリズムの問題もここに横たわっていると理解する一方で、日本に向けて紹介する機会が殆どないまま、二十年近くが瞬く間にすぎました。この間、私は大学院での専攻に民芸デザインを選び、アラビア語絵本の紹介活動や、エジプト人への日本語教育に新しい面白さを見出し夢中になるうちに、アラブ音楽への関心も若干忘れていましたが、『アラブ調査室』で自由に書いてよいとお許しを頂いたので、久しぶりにダール・アルヒラール社の資料室で収集したスクラップのデータフォルダを開きました。



アラブ音楽学院の庭に設置されたワッハーブ像。
2026年4月筆者撮影。

アラブ音楽について何を書こうかと考えて、ワッハーブの名曲「エンタウムリー」は既に日本人愛好家に語りつくされている感があるようなので、その真逆の「バスブーサ」を取り上げてワッハーブの別の一面を取り上げてみました。

そしてワッハーブ評価に大きく影響をした「盗用リスト」について改めて検索したところ、批判側だったアジーズ・アルハッジが2010年代に入りこの問題には関与していないと発言していたとの新情報を読み、少し興奮しています。今の段階ではまだトリビアですが、情報の出どころと真偽詳細を確かめた時、また新しい知識にたどり着くのではないかと見込んでいます。この論争、当時の関係者が存命のうち、なかなか決着が付きそうもありません。

今年もムハンマド・アブドルワッハーブの命日である5月4日がきます。どうか「盗用リスト」疑惑について、蒸し返されないよう祈ります。

富澤規子（とみざわのりこ）

Ahram Canadian University (エジプト)言語翻訳学部日本語教師。エジプト文化省立大学校アカデミー・オブ・アーツ (Academy of Arts) 大学院にて民俗学準修士号取得。アラブ、エジプト芸能についての執筆に日本アラブ協会機関誌『季刊アラブ』2017年秋第161号掲載「アラブ歌謡に著作権はあるのか」、2022年秋第181号掲載「流行終焉——21世紀エジプトのベリーダンス」などがある。いたばしボローニャ絵本館翻訳おはなしボランティア。おはなし会シリーズに2015年から「アラブのヤシの木（新宿区立大久保図書館主催）」講師。